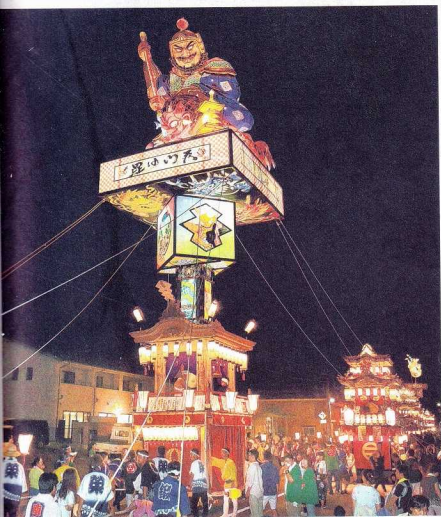


燈籠山祭り



町内をめぐる燈籠山人形を載せた山車
—20日、珠洲市飯田町

また作るために壊す

奥能登の小さな港町を、毘沙門天や閻魔大王が行く。珠洲市飯田町の燈籠山祭りは、神々の分身を宿した人形のパレードだ。

地上16メートル

20日午後5時すぎ、地上16メートルの山車「燈籠山」が、引き手の木遣り唄「きやうらけ」を合図に動き出した。日が落ちると、てっぺんに載った巨体はぼんやりと光を放ち、一段と神

キラコと
生きる
日本遺産

▶8◀

々しさを増す。

形こそ全く異なるが、燈籠山人形は民俗学上、「キラコ」として扱わ

れる。珠洲市在住の民俗研究家、西山郷史さんによると、空間の内部に明かりをとむすという共通点があるためで、能登町鶴川の袖キリコも同様である。

4カ月近くかけて完成する人形は、針金を使った骨組みの制作から、布の貼り付け、色塗りに至るまで住民の手作業だ。地域の老若男女が総出で仕上げる人形の完成度は高く、毎夏、数千人の見物客をうならせる。

しかし、祭礼委員長の濱野重雄さん(69)に聞く

と、人形は2年で作り替える

「本番だけが祭りやない」

る決まりがあり、役目を終えることがしてしまふ。せつかの労作を廃棄してしまふのはもったいないのではと水を向ける。濱野さんは諭すように語り始めた。

「本番だけが祭りやない。人形作りも含めて準備が、一番大事や。作るために壊さんん」

濱野さんによると、祭りは昔から、教育の場、交流の場としても機能した。子どもたちは寄付金を集めるために頭を下げて町内を回り、作業場に戻ると材料や酒の買い出しに走った。酔った大人の小言を聞き、時には叱られ、社会の厳しさを体に刻んだのだという。

今年、副総取締役を務めた青木英樹さん(43)も、祭りに育てられた一人だ。

「飯田には、背中じゃばを教え てくれた親父のような存在がいっぱいある」。世代が離れていても、一緒に祭りの支度をすると、本当の家族のように親しくなるといっ

わざと遅く

祭り最終日の深夜、町内を巡る8基の山車は、徐々に速度を落としてふらふらだ。引き手の多くが泥酔してふらふらだ。スピードが遅くなったのは酔いや疲労のせいではなかった。

「祭りが終わるのが寂しいから、わざと遅く進んだらんや」。隣にいた地元女性が教えてくれた。東の空は白んでた。労をねぎらい、抱き合ふ男たちの目に、うつすらと涙がにじんでいた。(清水義晃)